Viator

VOL.30

クリスマスと２０２２年の新年のごあいさつ

北白川教会主任司祭ウィリアム神父

聖ヴィアトール北白川教会の兄弟姉妹のみなさん、今年も年の瀬を迎え、クリスマスがやってきました。すべてが光り輝き、外では、お店や家でも、すべてが輝いていますが、私たちも心を輝かせましょう。困っている人、病気の人、孤独な人にとっての星になろうではありませんか。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、使徒ペトロのように、「主よ、私たちは誰のもとに行けばいいのでしょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っています」（ヨハネ 6･68）と言いたくなるかもしれません。クリスマスは、イエス様が私たちに会いに来てくださることなのです。手を広げ、心を広げようではありませんか。私たちはイエス様を歓迎し、私たちの歩みと人生を導くことのできる方と共に歩みましょう。

飼い葉桶に眠る幼子が、私たちの信仰の道を助

けてくれますように。

新しい年に向けて、皆様のご健康やご多幸、平和、そしてご家族やご親戚、ご友人と分かちあえる愛を心よりお祈り申し上げます。

飼い葉桶に眠る幼子が、私たちの信仰の旅の道を助けてくれますように。新しい年は、愛する人や、なかでも感謝する人との距離を縮めるチャンスです。

新しい年は、皆様がご家族やご親戚、ご友人と分かちあえる平和で幸せな愛のある1年を過ごされることを心よりお祈り申し上げます。宣教チームのメンバーを代表して、また私自身、幼子となった神があなたを愛に満ちた存在で満たしてくれることを祈ります。

クリスマスと 2022 年を迎えるにあたり、主がみなさんを祝福し、喜びで満たしてくれますように。クリスマスおめでとうございます。どうかよい年をお迎えください。

イエスの瞳から出る四本の光線

リノ・ベリーニ神父

待降節から降誕節にかけての季節は、私たちキリスト者にとって一年で復活節の次に大切な時期。この時期に教会は、よく選ばれた聖書の言葉を使って、イエスについての教会の理解を私たちに伝える。この時期の朗読箇所にはキリスト教信仰のすべてが含まれており、十分に消化できないほど豊かだが、教会が私たちに伝えたいのはまず、ベツレヘムで生まれた赤ちゃん。私たちはその前に集まり、黙想し、祈り、楽しみ、愛するように勧められている。この赤ちゃんの背後にある大きな秘密を啓示として教会は私たちに伝えたいのだ。

福音書記者ヨハネの言葉を借りると、「光」であるキリストは人間にとっての四つの大きな謎を照らし出す。たとえて言うなら、イエスの瞳からは四本の光線が出ているのだ。

第一の光線は、父なる神の深みに向かう。光であるイエスは鏡として、私たちが神から愛されていること、神が遠い方ではなく私たちのそばにいることを映し出すのだ。そのことはヨハネ福音書の朗読箇所（日中のミサの福音朗読）に書かれている。「初めに言があった」。この箇所は創世記を思い出させる。初めとは、創造の前の段階のこと。創造は時間の中の出来事だが、創造の前の段階とは神の永遠のこと。つまり、すべての生けるものの前に神があり、そこにキリストがいたのだ。イスラエルの民が自慢していたように、神は無口な神ではなく、口があって語り、その言葉は口先だけではなく、生きたものである。キリストはその神の言葉なのだ。ヨハネがこの箇所で私たちに言うのは、キリストが神の知恵であり流れる命であること。そして、「言によらずに成ったものは何一つなかった」。これはヨハネのすばらしい表現だ。キリストがすべてであり、キリストの他に、キリストの外に何もなく、無であること。キリストによって新しい命が与えられ、すべてが新しく創造されるのだ。

第二の光線は、私たち人間の闇を照らし出す。ヨハネはさまざまな表現で人間がキリストを受け容れなかったことを語っている（1･5、1･10、1･11）。私たちの生活には暗闇や苦しみがたくさんあり、私たちは暗い部分だけに目を奪われがちだ。しかし、イエスが来ることで、私たちの生活が照らし出され、私たちの人生の一つ一つの出来事の意味が明らかになり、苦しみの

中にも慰めを見い出すことができるようになる。人間は神から愛されていることがキリストによって私たちに啓示され、人間はなぜ生きているかがわかり、私たちに価値があることがわかるから。さらにそれだけではなく、パウロもヨハネもはっきり言うように、神は私たちのそばにいるために、神であることさえ捨てて私たちの生活の只中に入ったのであり、降誕とはその出来事なのだ。また、教皇フランシスコが言うように、イエスによって神は人間の罪のど真ん中に入って、罪を癒す。そして、罪によってもたらされた死から人間を解放して、神の子としての新しい命を与える（ヨハネ 1･12）のだ。

第三の光線は、過去の闇を照らし出す。過去とは、例えばイスラエルの歴史のこと。私たちは待降節にイスラエルの歴史を振り返ったが、災いや追放があったとしてもイスラエルの歴史は無意味ではなく、救い主が来る道として意味があったことがわかるのだ。

注意すべきなのは、イスラエルの歴史だけではなく、私たちの東洋の歴史もそうだということ。東洋のさまざまな文化や宗教もキリストに向かうものであったことがわかる。孔子、孟子、釈迦、聖徳太子など、人々をよりよい生活に導いた人物は、イエスの名前を知らなくても、イエスの到来を何らかの形で準備したことがわかる。つまり、イエスが来ることで、過去のよいものが否定されるのではなく、より深い意味を与えられるのだ。

そして、個人的な過去もそうだ。イエスの顔の光に照らされて、私たち一人一人の過去の意味も明らかになる。私たち一人一人の過去も、たとえ意識されていなくても、何らかの形でキリストのための準備だったこと、神の愛に導かれていたことがわかる。逆に、私たちの人生の意味は、イエスが来ることではじめて明らかになるのだ。そして、隠れた小さな愛の行ないなど、他の人が知らないことも、神の目に永遠の価値があることが、イエスによって私たちに知らされたのだ。また、最大の罪人であっても、その悔いの溜息は神の心に響くことをイエスは言葉だけではなくその行いで示した。

亡くなった両親など私たちの祖先も、私たちがキリストに出会うことによって何らかの形で癒される。救い主として来るイエスは、私たちの現在だけではなく、私たちの過去も癒すのだ。私たちが洗礼を受けるとき、その救いの恵みは何らかの形で、私たちの祖先にも働く。これはとてもすばらしいことだ。

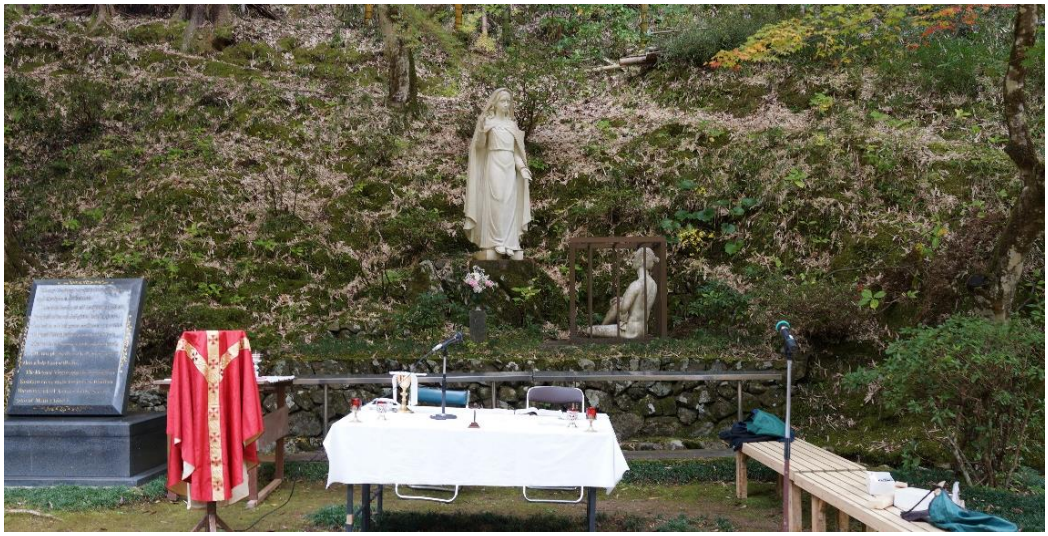
第四の光線は未来を照らし出す。ヨハネの福音書を含め四つの福音書は、未来について豊富に語る。キリスト教は今ここで生きるための道徳であるだけではない。キリストは、ずっと先へ進むための光であり、道を歩む私たちを正しい方向に案内し、永遠の生命に辿りつくまでともに歩むのだ。そして、たとえ彼の弟子になることで、いろいろな苦しみや迫害があったとしても、彼に続いて神の世界に辿りつくことができると希望を与える。このテーマは、テトスへの手紙（夜半のミサと日中のミサの第二朗読）にすばらしい言葉で説明されている。

最後に、四つの光線を放つイエスにはどこで会えるだろうか。ルカ（夜半のミサの福音朗読）が言うのは、馬小屋にいる、この人を見よ、これがしるし、ということ。しるしとは、私たちが歩く道の標識のこと。私たちはその方向に生きるべきなのだ。そして、か弱い赤ちゃんがしるしということは、生活の中にある小さくて見逃しやすいことを大切にしなさいということだ。生活の中にある小さな奉仕や課題にこそ、キリストに出会う可能性がある。

（当教会サイトより転載。）

コロナ禍にあって、津和野の証し人に倣いて

アンブロシウス H.H.



屋外ミサの祭壇。正面は迫害で使われた三尺牢が再現されている

11 月に、2 年半ぶりに津和野乙女峠の記念ミサに参列してきました。前回の参列がコロナ禍前の 2019 年 5 月の乙女峠まつりで、列福調査開始記念ミサの時だったので、いささか隔世の感があります。全国から集まった 1,000 名以上の巡礼者と十数名の司教様での聖母行列と、超満員の乙女峠広場での記念ミサだった前回と比べれば随分こぢんまりしたものでしたが、それでもようやくコロナ禍が一段落して県外からの一般参列も叶い、近県の信者や修道会関係者を中心に数十名が久しぶりに一堂に会することができました。

この津和野の地は、日本の為政者による公式の迫害としては最後のものとなる、1868 年からの浦上四番崩れで 37 名の犠牲者を出したことで知られています。中でも、わずか 5 歳でありながら自らの言葉で殉教を選び取った「もりちゃん」の話は、心を打たれるものがあります。空腹で苦しむ中、役人に「美味しいお菓子を食べさせてあげるから、キリストは嫌いと言いなさい」と誘惑されて、「天国にはもっと素晴らしいものがある」と、きっぱりと答えたと言います。しばらくの後、もりちゃんは飢えのため天国に旅立つことになりました。そして、もりちゃんにお菓子を勧めて迫害した役人は、その殉教のありさまを目の当たりにして、後に回心してキリスト者になりました。

また、津和野では、迫害に負けて口で棄教を表明した者には日雇いの仕事などが許され、食料を得ることができたと聞きます。彼らは物質的には満たされても自らの弱さを恥じ、棄教せずに迫害に耐えている、かつての仲間に人知れず食料を差し入れていました。禁教の高札が外されてから、彼らは一足先に故郷の浦上へ帰郷し、告解を経て再び教会に迎え入れられました。

浦上四番崩れでは、華々しい殉教の物語だけでなく、西日本各地に配流され、貧困の中でも神への信頼を失わずに誠実に生きた無名の信徒たちの存在も、大きなものがありました。「邪宗門を信じる者たち」との触れ込みで配流されてきた信徒たちの日々の生き様は、周囲の者の心をほどき、その地の信仰の初穂となったことでしょう。

乙女峠マリア聖堂と津和野「乙女の祈り」和紙人形

一方、現代の社会に目を向けてみると、暴力による信仰への迫害はなくなったものの、堕落や利己主義への誘惑により、迫害の時代よりも、かえって信仰を危うくしているように感じます。ネット社会による即座の情報のやり取りが、貧しい者同士がお互いに足を引っ張り合う、一度躓いて失敗した者の情報がデジタルタトゥーとなり本来無関係の人間までがこぞって半永久的に叩き続ける、などという事態の遠因となっています。このような風潮は、キリストの掟としての隣人愛とは程遠いものだと思います。もし、津和野の迫害の物語が現代の価値観の中で起こったものなら、改心者は信仰と引き換えにわずかな食料を得て、未改心者が飢えに苦しんでいるのは自己責任だと突き放し、帰郷後には改心者に対して、あの者は転んだ者だと、未信者までがこぞって叩き続ける、といった状況になったでしょうか。このようなことは、想像したくないですね。

昨今のコロナ禍は、まさに隣人愛が試されている状況と言っても過言ではないと思います。感染拡大防止のために不要不急の外出や会食の楽しみを控えるという犠牲を捧げ、より苦しい状況にある者に思いを馳せて祈る、ということは、信仰に適った行いの一つになり得るものです。一方、自分だけは大丈夫だろうとノーマスクで飲み騒ぎ、結果として無症候感染者となりウイルスをばら撒いてしまう、ということを、自由意志で選択することもできます。

また、このような利己主義的な隣人愛に反する誘惑と対極にあるように見えて、実は同じように危ういものの一つに、世捨て人的信仰があると感じます。これは一見熱心な信徒が陥りやすいのですが、今起こっていることはヨハネの黙示録に書かれているような世の終わりの兆候そのものだから、もはやこの世のものには何の価値もない、天国を待ち望んで祈ってさえいれば良い、というものです。これも、マタイ福音書のタラントンを地に埋めた者の喩えにあるように、隣人愛とは程遠いものへの陥りになります。

やはり、津和野の証し人や西日本各地に配流された無名の信徒たちのように、困難の中にあっても日々の生活を誠実に生きることこそが、今最も必要とされていることだと思います。誠実に生きた上で、もし何か失敗するようなことがあれば、その時は神様が寛大に赦して下さることでしょう。

Kiwi Christmas

カタリナ K.Y.

今年も昨年に続き何ともあっという間の一年でした。みなさん、いかがお過ごしでしょうか？私はというと、2 度目のクリスマスをここニュージーランドのオークランドで過ごしています。今回は機会をいただいたということで、ニュージーランドでの私のクリスマスを紹介したいと思います。

その前に―みなさんはニュージーランドがどんな国かご存知でしょうか？1 番に思いつくことといえば「羊」でしょうか？それとも「オーストラリアの近くにある国」でしょうか？ニュージーランドはオセアニア、オーストラリアの南東にある島国です。キウイ（ニュージーランド人の愛称）曰く、人口より羊の数の方が多いとのことですが、ニュージーランドの魅力はそれだけではありません。実はニュージーラ

K. Katherina Y.

2021 has been another quick year. I am spending Christmas, here in Auckland, New Zealand, away from my home country. Let me introduce you my experience of Christmas in New Zealand.

For some of you who might not know, New Zealand (NZ) is an island country in Oceania, next to Australia. NZ is often known with sheep, yes, people here say there are more sheep than people, but not only that. NZ has another name, Aotearoa, which was named by Maori people. Aotearoa means “land of the long

ンドには「アオテアロア」というマオリ語の名前があります。意味は「白く長い雲の土地」です。もともとニュージーランドにはマオリ族の人々が住んでいました。彼らはニュージーランドの公用語の１つであるマオリ語を話します（他に、英語、ニュージーランド手話が公用語)。後にヨーロッパの国々に発見され、イギリスの自治領であったことで有名です。それによりニュージーランドではマオリ文化とイギリス文化どちらもが大切にされています。英語が使われることがほとんどですが、多民族国家ということもあり、１人１人に独特な文化的背景があります。例えば私の友達ですが、ニュージーランド生まれのフィリピン人やインド人、サモア人がいたり、ドイツ人、オランダ人、マレーシア人の先生が学校にいたりします。

white cloud". Originally, NZ was first inhabited by Maori, and their language is Te Reo Maori, which is one of three main languages of NZ (Te Reo Maori, English, and NZ sign language). Then NZ was discovered by European nations, and it was once under the UK. Hence people here value Maori culture, but also English culture. English is mostly spoken but NZ is a multi-culture country, so everyone has a unique cultural background. For instance, I have friends who are NZ-born, but are Philipino, Indian, or Samoan! I also had German, Dutch, and Malaysian teachers at school.

ニュージーランドのクリスマスは季節が北半球と逆ということもあり、過ごし方が日本のクリスマスと全く違います。夏の暑さもあり、クリスマス休暇にはビーチでまったり、というのが定番です。ＳＮＳではサンタが海でサーフィンをしてる写真などがよく見られるくらいです。「夏だ！海だ！！」と思っている私に日付とショッピングモールのデコレーションがもう 12 月であることを思い出させます。この夏のクリスマスは日本で育った私としては、とても変な感じです。クリスマス当日には、教会のミサに行く人もたくさんいますが、家族で集まる人もたくさんいます。私のホストファミリーはというと、カトリックではないですが毎年家族でクリスマスパーティーを開いています。クリスマスのお祝いもそうですが、家族でまったり年度末を一緒に祝うこともとても大事なんだとか。私の友達も、クリスマスには必ず家族や親戚と集まっています。家族で一緒にクリスマスを過ごすのがニュージーランドでどれだけ大切に思われているかがよくわかります。特にオークランドの人々は、新型コロナウイルスの影響で、今までで一番長いロックダウンを今年経験したということもあり、周りの人々、そしてファナウ（マオリ語で「家族」）との繋がりがどれだけ大切かをしみじみと噛み締めています。

NZ Christmas is very different from Christmas in Japan as we are in the middle of summer! It is very hot, and we love going to the beach and spend time there. Often on social media, we see photos of Santa surfing at the beach. It feels very weird to me because I feel very hot and feel like swimming, but it is December and Christmas! I see the date or Christmas decorations at the mall and then realize, "Oh my god, it really is Christmas!!!". On the Christmas day, many people go to church, but most importantly come together as a family even if they are not Christian. The family who I am staying with is not Catholic, but they always have a family party on Christmas day. It is very important that they spend relaxing time together, but also celebrate Christmas and the end of the year together. Almost all my friends spend time with their own families and the extended families, which shows how significant it is to gather as a family in NZ. In addition, Aucklanders have experienced the longest lockdown due to Covid-19 pandemic this year. This definitely has made people realize the importance of connections between people, especially whanau ("family" in Te Reo Maori).

私はニュージーランドで計 3 年半ほど留学をしています。通っていたのはマリストカレッジという、オークランドにあるカトリックの女子校で、つい先月卒業したところです。7 年生から 13 年生、日本で言う小学校 6 年生から高校 3 年生が通う学校で、750 人ほどの生徒がいます。こじんまりとしたとても良い学校です。学校行事として年に 6 回ほど大きなミサが行われています。ニュージーランドの学校は 2 月に始まり、4 学期ありますが、一年で最初のミサはオークランドの都市部にある、聖パトリック大聖堂（次頁写真）で 2 月に行われます。ミサでは新年度の始まりと新しい生徒会長や委員長たちの就任のお祝いもします。他にも各学期にはハウスミサ(House mass)というものが行われます。それぞれのミサで学校の創設に深く関わったジャンヌ・マリー・シャヴォアン（マリスト修道女会創立者)、尊者ジャン-クラウデ・コリン（マリスト会創立者)、聖ペトロ（シャネル）司祭殉教者、聖マルセリン・シャンパニャット（マリスト修道士会創立者）を記念します。そして最も大切なマリストの日にもミサが行われます。学校祭のようなものです。聖母被昇天のお祝い日の頃に、マリストカレッジとマリスト会、そして聖母マリア様のお祝いをします。ハウスミサとマリストの日はミサが学校の体育館で行われ、マイケル司教とケヴィン神父が来てくださる特別な日です。残念なことに、今年はロックダウンの影響でシャヴォアンと尊者コリンのミサは行われませんでしたが、マリストの日はロックダウンに入る直前に祝うことができました。私は友達と一緒にマリストの日の装飾チームとお化け屋敷（学校祭の出しもの）のリーダーをしました。準備がとても大変だったので、あと少し遅ければ延期になっていたと思うと、本当に運がよかったです。特に私たち 13 年生にとっては最後のマリストの日だったので、無事マリストの日を祝うことができたのは本当にありがたいことでした。

I have been studying in New Zealand for almost 3 and a half years in total. I was studying as an international student at Marist College in Auckland and graduated this year. Marist College is a Catholic school for girls, and there are students who are Year 7 to Year 13 (Grade 6 in primary school to Grade 3 in high school in Japan). There are about 750 students so it is not a big school, but I must say it is such a lovely school. As a Catholic school, there are 6 major masses throughout the year. First, we have a mass at St Patrick's Cathedral in the central city of Auckland at the beginning of the year (schools start in February in NZ). We celebrate the start of the year with a ceremony for new student leaders. Secondly, we have house masses. NZ schools have 4 terms in total. In each term, we have a house mass. House mass celebrates our school founders, Jeanne Marie Chavoin (founder of Marist Sisters), Venerable Jean Claude Colin (founder of Marist Fathers), St Peter Chanel, and St Marcellin Champania (founder of Marist Brothers), one at a time. Finally, the Marist Day mass is the most important of Marist College. It is the day we celebrate our school, Marist Community, and Mother Mary. For the House masses and the Marist Day mass, we invite Bishop Michael Gielen (Auxiliary Bishop of Auckland) and Father Kevin Duffy (General Administration of Society of Mary in New Zealand), which makes the mass even more special. Unfortunately, we did not have Chavoin and Colin House masses due to lockdown, but we were able to have Marist Day just before we went into the lockdown. My friend and I were leaders of Marist Day decoration team and Haunted house (one of the activities for the day) so it was very lucky that Marist Day could happen. Additionally, it was the last Marist Day that my friends and I could ever experience as it was our last school year. We are so grateful that we could have Marist Day.

さて、私にとって北白川教会はとても大切で思い出深い場所です。生まれてから 10 歳になるまで毎週家族で通っていました。洗礼もまだ生まれたばかりの時にボアベール神父様に授けていただきました。父の仕事の都合で京都から引っ越して 10 年以上、未だにボアベール神父様の温かい手と優しい声、教会の雰囲気、そしてミサの後の賑やかなホールとテーブルに並んだごちそうが脳裏によみがえります。その後には兄や他の子供たちと一緒に教会の庭で数え切れないほど遊びまわったり、木に登ったり。大切な思い出です。他にも私が 8 歳か 9 歳の時、クリスマスのミサでマリア様の役を

Kitashirakawa Church is an important place for me even though it has been more than 10 years since I left Kyoto with my family. It is the church where I was baptized in, and I grew up until 10 years old. I remember Father Yves Boisvert's warm hand, his gentle voice, the atmosphere of the church, and the crowded hall with delicious foods after the Sunday mass, but I cannot remember how many times I ran around in the garden with my brother and other kids. Also, it was a great experience for

したことがありました。ただあまりにも長い 1 日だったため、私はミサの間に眠ってしまい、「マリアが寝ている、マリアが椅子の上で寝ている！」と言われていたそうな。北白川教会も、そしてその教会に通っている私の大叔母のことも、本当に懐かしく思います。

去年に続き、今年も多くの人が新型コロナウイルスの影響を受けました。辛い時を過ごした方がほとんどかと思います。病気で苦しんでいたかもしれません、大切な方を亡くされたかもしれません。だからこそ、このクリスマスの時期はどうかみなさんが少しでも気を休められるように、大切な人たちと時間が過ごせるように、心からお祈りしています。最後になりましたが、どうか素敵なクリスマスをお過ごしください。そしてお年を。みなさんに神様の御加護がありますように。

me to be Mother Mary for Christmas mass when I was 8 or 9. In fact I was called as “Sleeping Mary” because I fell asleep during the mass after the long day!! I miss the church so much as well as my great aunty, who had always been there.

Because Covid-19 has affected everyone badly, and everyone had a very difficult time, I wish people have a wonderful Christmas holiday from the bottom of my heart. I pray for all the people who are struggling with Covid, particularly who are very sick and lost loved ones. Finally, I wish you a very Merry Christmas, and an early Happy New Year. God bless.

コロナ禍の堅信式

マリア・フランシスカ T.Y.（日曜学校担当）

コロナ禍で延期になっていた堅信式が、10 月 31 日、北白川教会で行われました。洛北ブロックの合同堅信式で、北白川教会からは、3 名の子どもたちが堅信のお恵みを頂きました。

イエス様はご昇天の後、約束された聖霊を送って、臆病であった弟子たちを勇気ある宣教者に変えられました。堅信式は、特に幼児洗礼の子どもにとって、信仰を証しし、聖霊の賜物を頂いて使命を果たすよう導かれ、信者として一人前になる大切な秘跡です。受堅のための準備の勉強会は、ウィリアム神父様が 4 回行ってくださいました。

私は、今回の堅信式で 3 名とも自分で堅信名を選んで決めたことに深く感動しました。洗礼名を大切にしつつ、たくさんの聖人の中から誰の名前を頂こうかと考える時間は、信仰を深めることにつながったと思います。延び延びになった堅信式のおかげで、待つ、じっくり考える時間をいただいたこともお恵みだったのだと思います。

また、R.T.君の代父を日曜学校の先輩・K.H.君が緊張した面持ちで務めた様子も大変ほほえましく、子どもたちの成長を感じました。

コルベ神父様のように

マキシミリアノ・マリア・コルベ M.H.

堅信名は自分で考えたということもあり、気に入っております。自分はまだまだ若輩者で素直に神様の愛を信じられるほど勇気がないのですが、マリア・コルベ神父さまは強い信仰心を持ち、マリアさま及び神様の愛を信じておられたので、自分もいつかこのような人物になれたら、何か変わるのかなと思い、堅信名を決めました。

これを機に、逃げずに自分や神様と向き合ってみようと、思い始めています。

最後になりましたが、勉強会をはじめ、プレゼントの準備や当日の準備など、コロナ禍のなか堅信式を無事に行うために、たくさんの人の貴重な時間と労力を費やして頂き、誠にありがとうございます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

安心と優しさを感じて

ドメニコ・サビオ R.T.

堅信をうけたから、といって、日常生活が劇的に変化した、ということはない。今日は昨日の続きということも変わらないし、いきなり昨日より信心深くなったわけではない。

けれど、気持ちに変化があったことを感じている。それは、ポジティブな気持ちが芽生え、今まで気にしていたことが、楽になったような気持ちになる。守られている、守護されているという安心と優しさを感じている。強制的に堅信を受けなくてもいいが、基本的に受けた方が良い、と思う。何も日常は変わらないが、たしかに気持ちに変化はあった。それを大事にしていきたい。

立派な信者になりたい

マリア M.S.

コロナウイルスのことで遅れてしまいましたが、無事に堅信を受けることができてよかったです。堅信式を見たことがなかったので、少し不安もありましたが、たくさんの方々が見守って下さり、安心して受けることができました。

そして、司教様がしてくださった、使命についてのお説教は、とても心に響きました。これから共同体の一人として、キリスト教を広める努力をする、立派な信者になりたいです。

編集後記

今年もコロナの一年だった。コロナでは多くの方が亡くなり、ワクチン接種後に亡くなった方も（報告されていない方を含め）たくさんおられる。ワクチン後遺症に苦しんでおられる方もいるし、救急車は走り回り、経済苦で自殺する女性も増え、不登校になった子どもたちも多いらしい。

第五波が収まってくる頃、弟一家がコロナに感染した。姪と接種済みの弟は喉の痛み程度だったが、未接種の弟嫁はしばらく入院した。その入院中に、あろうことか、姪が学校に行けなくなってしまった。精神的ショックか、同級生に後ろ指さされたくなかったのか、自分がうつしたという自責の念もあったのだろうか。症状が最初に出たのは三人のうち姪だった。

私としては、会いに行くわけにもいかず、ただ電話で弟の話を聞くだけだったが、弟にアイデアが浮かんだようだ。「コロナじゃなかったのとちがうか」と娘に言い聞かせることにしたというのだ。確かに、PCR 検査は偽陽性がありうるし、彼女の症状はたいしたことがなかった。弟はその方針で押し切ることにしたようだ。電話を切った私の心に浮かんだのは「父は強し」。よく「母は強し」と言われるが、母だけじゃない。「父は強し」だ。その後、少し時間はかかったが、姪は学校に行けるようになった。

今のこの情勢で、たいへんなことは山のようにある。でも、一つ確かなのは、私たちに天の父がいること。強いどころか、全能の神である父が天におられる。コロナを誰かに感染させるどころか、明らかに過ちを犯しても、回心するなら、「何もなかった」と私たちをゆるしてくださる父だ。「神は私たちがどんな罪をおかしたかよりも、私たちがこれからどんな聖人になるかに関心がある」（リノ・ベリーニ神父）。その天の父の思いを、すべてを賭して伝えるべく赤ん坊の姿で来られた方を私たちはクリスマスに祝う。　　（マリア・ヨハンナ M.M.）

（表紙画像は https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_birth_of_Christ;_outside_the_crumbling_cave,_an_angel_an_Wellcome_V0034608.jpg）

カトリック聖ヴィアトール北白川教会　2021 年 12 月 24 日発行
ホームページ：https://www.stviator-kcc.org/